

『野性の実践』

ゲーリー・スナイダー著、重松宗育、原成吉訳／山と溪谷社

私が最も影響を受け、そして今尚支えられている詩人ゲーリー・スナイダーについて紹介したいと思います。スナイダーは1930年サンフランシスコに生まれました。詩で「世界を100分の1インチ動かした」と呼ばれるビート詩人の一人であり、環境活動家、仏教徒、大学教授として今も精力的に活躍しています。1955年からおよそ10年間に渡って、京都大徳寺で禅の修行を行いました。その後、スナイダーは、日本で研鑽を積んだ仏教と科学の見地を融合して、独自の生態学思想を形成していきました。1975年、詩集『亀の島』は環境意識の視点が評価され、優れた報道、文学作品に与えられるピューリッツァ賞受賞となりました。この詩集は、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』と並ぶ環境文学の名著となっています。私は学部3年生のときに、スナイダーの作品を英語の先生に紹介してもらいました。アメリカでカウンターカルチャーのリーダー的な存在であったアメリカ人がなぜ、日本で禅を学びその後エコロジー運動をアメリカで中心となって行っていたのか、とても疑問に思いました。アメリカ文化文学を学ぶ学生であるからこそ、この疑問を私なりに解決してみたいと思うようになりました。1996年に『野性の実践』というエッセイが出版されました。一般読者だけでなく、エコロジー学専門のテキストとして、1990年代以降多くの大学の講義で読まれています。

誰でも、とくに若いときに悩まされるのは自分は何者か、自分は何をしているのか、何が起きているのか、という疑問です。私は北アメリカ北西部の太平洋岸にある小さな農場で育ちました。17歳のとき、「ウィルダネス協会」に入会しました。この会は今もいい仕事をしている全国的な組織です。20代には、働いたり、北米西部の山や林をあちこち旅行し、それから日本に行きました。私は、日本の山男たちと出会い、本州や北海道の険しい山々で、山歩きや登山の案内をしてもらいました。それに京都で礼儀作法や正式な修行を体験できたのは、本当に幸運なことでした。そして、最終的にアメリカに戻り、その巨大な空間を新たな目で見直しながら、私は、小さなグループのための教室や研究会を開いて、みんながもっと自然に親しむよう仕向ける努力をしました。様々な人と

語りあいました。こうして学び、教えた経験が、本書のエッセイになったという次第です。(序文より)

本著を読むと、環境保護運動を実践していく精神の根幹が、スナイダーが日本で学んだ仏教、特に道元の著作であること気づきます。日本人としてはその洞察の深さに驚かされます。本著の特徴は環境保護運動の根本が生態地域を意識した運動の展開にあると言明したことにあります。生態地域は行政地域とは著しく反したもので、森林を中心としたものの見方を提案するものです。このような大きな視点の転換をスナイダーは仏教から学んだのでした。のちに、生態地域主義運動は森林保護、河川の保全、市民の環境教育などの観点で社会的に高く評価されていくことになります。スナイダーのエコロジー思想は持続可能な社会の実現に欠かすことのできない環境倫理を教え導くものであります。

執筆 者 紹 介

高橋 綾子

教育開発系准教授。専門領域は、アメリカ現代詩、環境文学、ゲーリー・スナイダー研究。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『野性の実践』ゲーリー・スナイダー著(重松宗育、原成吉) 山と溪谷社
2000年 2,100円
『亀の島』ゲーリー・スナイダー著(ナナオ・サカキ) 山口書店 1991年
2,039円

ブックガイド目次へ